

佛典について如何なる研究が出来て居るかは門外漢の自分には分らないが大體の傾向は曾て紳博士が譯述せられたペリオ氏の「イラン語族の民衆が中央亞細亞並に極東の地に及ぼせる影響」(藝文大正元年第八月號)といふ平易な講述を見れば窺知し得られると思ふ、ただ自分の如き學問の立場にあるものから見て、甚だ興味のある事實と思ふのは、此等の佛典の研究によつて、從來梵語から譯せられたもの、若しくは系統の曖昧であるとせられた佛語の類が、往々此等西域諸國の語であることに氣の付くことである、仮へば沙門なる語が龜茲語の *Samāne* で梵語の *Sramaṇa* でなく、沙彌が龜茲語の *Samir* で梵語の *Sramaṇera* でなかつたり、出家が龜茲語 *Ost mein lande* 即ち「家から出ること」の意譯、外道が同語の *parnañe* 即ち「外にある」の意譯であつたり (Lévi, *Le Tocharien* B. J. A. 1913. p. 313) 瑠璃・璧瑠璃が梵語の *vaidurya* プラクリットの *verulia* よりも、ソグド語の *virūlya* であらうと思はれたり (Pelliot. *Un fragment du suvarnaprabhāsasūtra*. 1913. p. 26) するが如きである、此等西域諸國の僅少の言語の支那に翻譯されて居るのを據にして、直ちに兩者の佛教上の關係如何を求めんとするのは危険であらうが、之を佛教の東方傳播史上の事實と併せ考へるならば、支那佛教研究上重要な資料と成り得ると思ふ、自分はかゝる問題には觸れ得ないが、しかもかゝる問題を別にしても、從來知り得なかつた西域諸國の文化が、少くとも或る影響を東方に及ぼして居るものであることを知り得るに於て、多大の興味を感ずるのである、これについては更に五の項に於て述べる。

基督教の經典はソグド語ウイグル語中期波斯語ペーレキのものと共に漢文のものとが見出されたが、ともに數の上からは僅かに止るやうである、これについても宗教學の立場から如何なる研究が施されて居るかは知らないが、歴史上の